

高樹のぶ子



寒雷のよう

文藝春秋

寒雷のように
高樹のぶ子

文藝春秋

寒雷かんらいのよう

昭和五十九年四月二十五日 第一刷

著者 高樹のぶ子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表〇三三二六五―一二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

定価 九八〇円

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目次

寒雷のように

5

麦、さんざめく

75

残光

141

あとがき

カバ　　舟越保武
「若い女の顔」
装幀　花村　　広

寒雷のように

寒雷のように

陽が空にあるうちはあたりの家々、ことに屋根から樋にかけてが燃えるように輝いていたが、紺色の空気に包まれてからは、手足がひりひりと痛むくらいに冷えてきた。

服部京子はハイヒールの先にくっついた白い土を入口のマットに二、三回とすりつけ、山海屋のわざと古めかして作られた引き戸をあけた。

「いらっしゃい、なんだ」

「あれ、なんだだって」

「なんだですよ、たまにゃあ相手のおらん女がひとりでぶらっと入って来ませんかね」

炭火を上から煽っている顔馴染みの男が店の奥へ目を流しながら言うので、油と煙にかすむ橙色がかった電光を透かし見ると、カウンターの一番奥に、村井鉄平は頼杖をついて、やはり京子を透かし見るようにして笑っていた。

「どうだった、じいさん」と鉄平がいった。

「よろこんでた、協力は惜しまないって言ってる」

大学入学のときに買った贅色のコートを丸めて、隣りの椅子に置きながら、京子は祖父豪一郎がそれを言ったときの、頬のあたりに突然、若い、生ぐさいような血気が押し上がってきた顔を憶いだし、わけもなく気持が揺らいだ。あの一瞬の目の輝きは、七十五歳の筋張った、細い肉体の底に何十年も生き続けてきた古武士のような頑固さが、ふとしたはずみでほとばしり出たといった感じだった。

「そうか、じいさんがそう言うなら、この企画は成功間違いなしだ」

たった半年ですっかり新聞記者らしくなった鉄平の言葉つきは、京子には頼もしく見えたり、また、微妙な感覚のざわつきを無視して大きくひとからげにして断定してくるようなところ、ふと不安を覚えたりする。

「崔さん、まさか軍服着ては来ないわよね」

京子は手放しでよろこんで見せる鉄平に、また、豪一郎の顔に、水を浴せるように呟いたつもりだったが、

「そんなことはないよ、軍服ってことはないだろ、彼は韓国のエリートだから」

鉄平は妙な理屈を言い、「おい、イワシ焼いてくれよ」と、ほかに客がいないので暖簾の奥に引っこんだ男に大きい声で頼んだ。

左胸に、横に細長い勲章をずらりと並べ、肩には星飾り、少し額がとび出た感じで、遙かなたの遠く煙る山稜でも見ているといった居ずまいで顎をひく崔の、静かな軍服姿を憶い

だしたのだが、続いて目に浮かんできたのは、駐韓米軍を閲兵する彼の雄姿だった。爪先が丸くつき出した軍靴と鉄兜を身につけた兵隊が写真の右側に整列している。遠くは小さく豆粒のように、近くは写真の天地いっぱい立つ軍人の長い列を左に見ながら、右手をこめかみのあたりに斜めにかざした崔が、こちらに向かって歩いてくる一枚である。崔の傍には頭ひとつ高いアメリカ人が同じように敬礼し、寸分違わぬ感じで左足を踏み出した瞬間にシャッターが切られている。曇天のうそ寒い気配や、後方に火の見櫓のように立つ無線塔に吹きつける風の強さまで感じられる写真だった。京子が見たことのない韓国の空である。

鉄平は、戦後二十年近い歳月のあいだに何十枚となく送られてきたこれらの写真を見ていないから、京子が「軍服」と言った意味も、そのひとことが醸し出す手触りまでは理解ができないのだと、京子是不満めいた顔になる。

その崔が軍務と兼任するかたちで石炭公社の要職についたのは一年ほど前だった。それ以前にも鉄鋼や船舶などの重要なポストをいくつか経験し、そのたびに出世していった。

クリスマス、盆、といった折々に隣国から送られてくる小包をほぐくと、必ずといっていいほど近況を写した写真が入っていた。写真をひっくり返すと「豪一郎先生へ、大韓民国陸軍准将、崔将守」と見事な筆づかいでサインが施されている。「貴家あって、現在の私があります」「私の青春が眠る山河に幸あれ、崔はいまも先生の御尊顔と向き合っております」といった一文が書き添えられているものもあった。

一九五一年四月、とだけ裏に書かれた何枚かもあった。それらは、草むらに横たわる屍体を撮ったものだ。腹が脹れ上がったり、なぜかズボンがずれ下がって肛門が真黒な穴となった人体が、水筒や、頂上が少し盛り上がる円筒型の被りもの、毛布のように厚手の上衣などのあいだに手足を思い思いの角度に広げて横たわる写真のいくつかを、雪乃は子供の京子から慌ててとり上げ、豪一郎にまわしたのだった。

西ドイツの石炭産業を視察した帰り、是非豪一郎先生を御訪ねしたい、日本へ留学中は、母親のごとく可愛がって頂いた奥様の御墓へも参らせて頂きたい、自分としては一週間の滞在が許されるがいかだろうか、という突然の手紙が舞いこんだのは一カ月前のことだったが、そのときの豪一郎は、この何年も見せたことのないような喜びを体全体で表わした。しかしそれはひと晩かぎりのことで、翌日は落ち着かない素振りが見えた。鉄平が家に来たときは戦前の賑やかだった身辺を自慢し、また懐かしむように話すのだが、話し終えると妙にしょんぼりとしてしまう。京子は、崔の来訪が豪一郎にとって想像以上に大きい出来事であることを感じていた。それは否応なく、退職して二十年になる彼の老いを、家族の前に露わにした。

一方雪乃の、迷惑というわけではないが何か臆するようなためらい、当惑気味に目を伏せる仕草は、京子を別種の不安に駆り立てたのだった。

この不安を、婚約者である鉄平にうまく伝えることができないのがもどかしい。そのうえ

彼は、いちはやく新聞記者の本領を発揮し、

「よし、それはいい、記事になりますねえ。滞在記のようなかたちでまとめようか、じいさんの許可をもらってくれよ」と張り切って言うものだから、京子は、気持のどのあたりにひっかかる結び目のようなしこりを、鉄平に示す機会を失ってしまった。

雪乃の困惑の意味が、ただ単に我が家の戦後の疲弊ぶり、とくに婿養子に入った父が家を出て行ったあとの、何年も大黒柱がとつ払われた状態の惨めさを遠来の彼に隠しようもなく、といったこと以上に、もうひとつ別の、雪乃の少女のような部分を脅かす何かがあることに気づいている京子は、「がんばっていい記事を書いて」と、手放して応援する気にはなれない。「書いてもいいけど、余り大きな扱いにしないでよ」と俯いて言うが、「崔さんにとってじいさんと死んだばあさんは、日本の父、日本の母なんだよ、それを立身出世した息子が嗜れ姿で訪れる……不幸な時代を越えた美談だよ」と、すでに頭の中にできあがった記事を読むように言うものだから、京子はむすっと黙ってしまったのだった。

いまはT高校と名前を変え、市を見おろす高台に白い鉄筋コンクリートの校舎を並べているが、豪一郎が終戦まで教頭をしていたその旧制中学は、当時もいまも、全国に四つしかないという曹洞宗立の仏教校である。朝鮮、台湾などからも、宗門関係の子弟や宗門の推薦を受けた青年達が、はるばる海を越えてやってきていた。

彼らは現地の日本人学校で学び、経済的に恵まれた家の男子が多かったという。豪一郎が

自宅の一部を改造し、常時二、三人の留学生を世話していたのは、豪一郎の幅広い人柄と、面倒見がよく人の世話が好きだったという豪一郎の妻トヨがいて可能だったことだろうが、それと同時に、預かる青年達の親元から送られてくる金や物品が、教員の安い給料を援けていたことも、こうした状態が七、八年と続いた理由だろう。

たとえば崔にしても、鴨緑江の河口附近、新義州の豪農の息子で、夏休みがあけてこちらに戻ってくる折には、体長六センチもある、日本では決して見ることできない白魚の干物を大箱で五個、ごまのたっぷり入ったブタの角煮を一斗缶いっぱい、といったような土産を持参した。世話をした青年達のなかには戦後帰化し、すっかり日本人になりきっている者も多いが、文川と名前を改めた張信奉、同じく金山と名を変えた台湾出身の金孝応も、故国では裕福な家庭の息子だったと京子は聞いている。

勿論日本名は豪一郎がつけてやったり、上の学校へあがる者へは彼らの保護者として力を尽した。崔も卒業後東京の専門学校へ入ったひとりだが、改名は頑なに拒み、ついに崔のままで通したらしい。

韓国で軍人としてめざましい出世をとげている様子が伝わってくると、豪一郎はそのときのことを憶いだし、気骨のあるやつだった、と誉めるが、こういう一事にも現われる当時の崔の自我の強さは、豪一郎の目にどんなふうに映ったのだろうか、と、現在の豪一郎の言葉とは遠いところにある古い真実を探るような、少し意地悪い気持がきざしてくる。崔を誉め

る言葉が大袈裟になればなるほど、豪一郎の表情の片隅に、かすかなわだかまりとなつて浮かんてくるものがあるのを、京子は知っていた。

祖母トヨが亡くなり、京子が小学校四年のときに父が出て行つた。老いた豪一郎と雪乃と京子だけが残る家は戦前の羽振りの良さに較べると寂しいものだが、小さい貸家から入ってくる金と豪一郎の恩給とで、京子は地元の大学に進学することができた。田畑も少しは残っている。勿論贅沢は許されない。

三人の暮しが始まつたばかりの家に突如送り届けられる隣国からのプレゼントの箱は、京子の目に、触れるのが怖いほど華美に見えた。子供心に、この家に相応しくない豪華なものをつきつけられたような戸惑いがあったのを覚えてゐる。けれどその中身はすぐに京子をとりにした。薄絹の洋服地。夜光貝の螺鈿を施した姫鏡台の漆の朱。そして何枚もの堂々とした崔の写真。我が家に欠けているものばかりが、どっと三人の前に溢れた。

「結局何年いたんだ」

「え」

「崔さんだよ、京ちゃんの家に」

「だから、旧制中学の一年から卒業までよ。もっともね、崔さんむこうで二年くらい病氣されたあとこっちに留學されたんで、年齢的にはちょっと上になるらしい」

鉄平は焼き上がったイワシをつついている。箸りとった白い身を箸の先でおろし大根と混

ぜ合わせ、大づかみにして口に運ぶ。

在学中に知り合い、彼はひと足先に卒業して大手の新聞社に入った。京子の卒業まであと四カ月あるが、それを待って結婚し、あとは東京の本社に行くことになるか、あるいは別の都市の支社に移るか、ともかく、この地を離れることにはなるだろうと、京子自身も雪乃も豪一郎も覚悟している。

京子のことがなければ鉄平がこのまちに留まりはしなかっただろう。瀬戸内の中都市といったこの土地では、市役所の中に記者クラブが置かれていて、各社二、三人が常駐していてなごやかなものらしいが、張り切って入社した鉄平には、少し物足りないだろうと、別に京子が強引に頼んだことではないのだが、彼に申し訳ない気がしている。

学生時代と同じアパートから通勤する鉄平だが、一週間に二度程度、京子の家へ来て夕食を共にしていく。すでに家族の一員となっている鉄平が自分を連れてどこか別の都会へ発っていくことを想像すると、やはり胸が痛んだ。

戦前の古い家の玄関前で撮った写真がある。藤椅子を並べて座る祖父母と、その後立つ二人の青年、それに今でいうと高校一年くらいにしか見えない子供っぽい母が、祖父母の横に、体を寄せるように写っている。豪一郎は鼻の下に太い髭を生やし、椅子の手すりいっばいに手を上げ、そっくり返っている。青年達は体の細さに似合わず大人びた表情をしていて、これが当時の十七歳だと言われればそうかもしれないと思うが、いや二十五歳だと言われ